泡の湯温泉

「大里峠は急な坂道が多いから、腹が減ったべ。何もないども、にぎりめしぐらいはあります。食ってみますか？」
宿屋の主人が、イトーに言った。
「おにぎり食べますか？バードさん」
「はい、お腹がすきました。でも、味噌だけはやめてよね。私大っ嫌いなの。あのにおいはがまんできないわ」
「バードさんの味噌嫌いは、充分わかっております」
イトーは、自分は味噌が大好きだが、この英国女性は大の苦手なのだと、主に伝えた。
しばらくすると、主は別々の塩おにぎりと味噌おにぎりを別々の入れ物に載せて運んできた。小熊の三郎がちゃっかりもらった干したマスの塩焼きもある。
塩おにぎりを一口食べたバードが思わず口を開いた。
「このおにぎりぜんぜんソルティじゃないわね。むしろ甘い。何だろうこのお塩は」
イトーは味噌おにぎりの代わりに、塩おにぎりにかぶりついた。
「うーん、本当だ。おじさん、この塩はいったいどうしたんですか？」
「味の違いがわかるとは、さすがエゲレスのお方だ。この塩は、海でからとれたものではなく、温泉から出てきたもんだ」
「へー！温泉から塩？」

「んだ、この川の上流に泡の湯温泉というところがあって、その温泉はしょっぱいんだ。
温泉を大きな鍋に入れて、3日も煮れば立派な塩ができるんだ。海の塩とはまた違って、
塩気がそんなに強くない。漬物作っても、本当にうまくできるよ。わらび漬け、食ってみて」
「うーん。いい味出てますね。深みのある味です」
イトーがしきりに感心していると、主が泡の湯温泉に伝わる物語を話し始めた。

泡の湯温泉の裏手に城山という山がある。そこに昔、豪族が住み着いた。その豪族が、このあたりに金塊が埋まっていると聞いて、土を掘ったところ、はたして金塊がひとつ見つかった。しかし、そのあといくら掘り続けても、金塊は出てこない。

ある日、もうこれ以上掘るのはあきらめようとしたその日、穴の底から突然熱湯が吹き出した。仕事をしていた下男は、やけどをしてしまった。豪族は、ここに館を建てて、湯治場を作った。そうして暮らしているうちに、湧きだした温泉が流れ出て行くところに何やら白い結晶ができているのが見つかった。それが山塩だった。

「みなさん、大里峠を越えてきなすった。急な坂ばかりだが、昔の荒川沿いの断崖絶壁を通る道に比べたら安全なもの。海はそう遠くはないが、ここまで塩を運ぶのは簡単ではながったのよ。大里峠ができる前は、大前様たちがこれから通る米沢の上杉藩のまで送り届けていたんだす」

イトーは、しきりにうなづきながら、バードに通訳した。

「イギリスにも、山塩はあるのよ。マウンテンソルトというういうかどうかわからないけど、ロックソルト＝岩塩とは言うわね。世界一たくさん取れるわよ。私ん家にも、山塩がおいてあって、お母さんがおいしい料理を作ってくれた」

「やっぱり温泉となって湧いてくるのですか？」

「いや、イギリスにはバースぐらいにしか温泉はないけど、塩の混じった地下水がたくさんでるのよ。それを煮詰めてお塩にするわけ」

「なるほど。うまいものはどこでも一緒ですね。泡の湯は今はぬるい温泉になってしまったが、名前の通りブクブク泡が出てて、ゆっくり入ってるとあったまるよ。炭酸というものだって」

温泉に入りたいのは山々だが、先を急がなければならない。